

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅹ

—後期中葉加曽利B式土器文化期の様相 その3—

—土器編年案構築に向けて—

縄文時代研究プロジェクトチーム

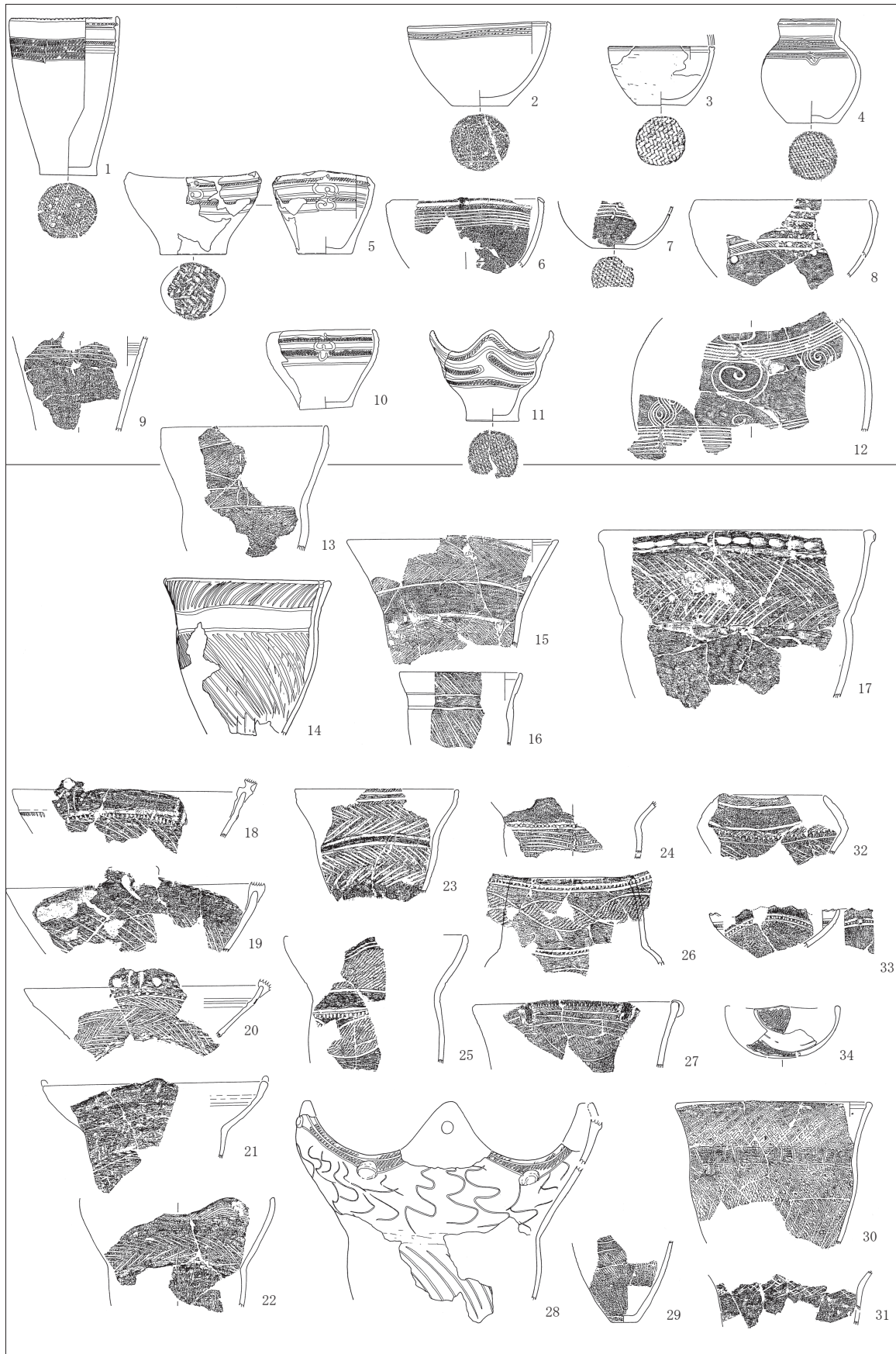
はじめに

今年度は前回集成した遺構からの一括出土事例に基づき、加曽利B式期の土器編年案作成を目指す。しかしながら、前回の集成作業で明らかになったように、当該期の土器群は器種・型式が多様・複雑化する一方で、各段階を通じた良好な共伴事例には必ずしも恵まれてはいない。特に、住居内の出土土器にある程度の時間幅が認められる事例がある一方で、良好な一括出土事例が見出せなかった時期もある。そこで本稿では、一括事例による編年ではなく、前回の作業で抽出した一括出土事例各種土器を、ある程度時間軸に沿った形で並べたものにとどまらざるを得なかった。なお編年上のヒアタスが認められる箇所については、個別の出土事例や他地域の事例を参考として引用し、その隙間を埋める必要があり、また掲載事例についてもなお型式学的な操作が必要である。次年度の作業への課題としたい。

土器は一括出土事例ごとに左から、精製の深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器あるいは注口土器、浅鉢形土器あるいは算盤形の土器、粗製土器の順で並べている。しかしながら出土数の多寡や時期ごとにおける器種のバリエーションの有無や文字通り紙幅の都合もある為、かならずしも各器種が上下に連なる表とはなっていない。同一遺構の一括出土事例でも、層位の明示がある場合、下層出土の土器を上段に、上層出土の土器を下段に配している。また同じく同一遺構の一括出土事例中に時間的に幅が認められるものは、時期的に古い段階の土器を上段、新しい土器を下段に配しているが、これも厳密なものではなく、詳細については本文中で触れるようにしている。特に共伴事例が多い横浜市華蔵台遺跡の19号住居跡・29号住居跡・32号住居跡および同市小丸遺跡の1・2号住居跡・14号住居跡・28号土坑は左右見開きの図表として、右側の図に精製の深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器を左側の図に浅鉢形土器あるいは算盤形の土器、粗製土器を掲載した。

華蔵台遺跡16号住居跡：加曽利B1式～B2式（第1図1～12、第2図36～39）

加曽利B1式期の共伴事例として華蔵台遺跡16号住居跡の事例を掲げる。本住居跡は最大時径8～10mほどになる大型の住居跡で、10回を超える建て替えの痕跡を残す。10回前後の建替えのうち、柱穴列の並びから16a～e号の5軒の住居跡が析出された。標高の最も低い位置にある16e号住居跡が最も古く、斜面上方側の最も標高が高い位置に構築された16a号住居跡が最も新しい。このうち最終段階の16a号住居跡は加曽利B1式に比定されるが、最も古い16e号住居跡については、その形態から堀之内2式期に遡る可能性が指摘されている。住居跡覆土の遺存状況は良好で、斜面上方側で1m近い深さを有する。土器はピットから出土した第1図1・3と床面出土の第1図2・4、住居覆土下層の出土である第1図5～8・第2図36～38、覆土上層出土の第1図9～12、第2図39・40の3群に分けられる。これらのうちピット出土の精製土器の深鉢1と覆土上層出土の9、ピット内・床面から上層までの小型の鉢形土器2・3・5～8・10・11、同じく



第1図 加曾利B1～B3式土器（縮尺1/8）

1～12華蔵台遺跡16号住居跡：加曾利B1～B2式、13～35華蔵台遺跡29号住居跡：加曾利B2～B3式



第2図 加曽利B1～B3式土器（縮尺1/8）

36～39華蔵台遺跡16号住居跡：加曽利B1～B2式、40～52華蔵台遺跡29号住居跡：加曽利B2～B3式

床面出土の壺形土器4 また覆土中層出土の粗製土器37は加曽利B1式である。覆土上層出土の注口土器12が堀之内2式、同じく上層出土の粗製土器39が加曽利B2式と判断される。なお、図に掲載していないが、同じくB2式の粗製土器破片複数点が覆土上層出土として報告されている。床面から覆土上層まで出土土器の大半は概ね加曽利B1式に属するものとしてよく、堀之内2式の注口土器12は下層からの混入、B2式の粗製土器39が埋没後の流れ込みとすれば層位関係と土器型式の間に大きな矛盾は生じない。

1と9は精製の深鉢形土器である。直線的に外側に開く器形で、内面に3条ほどの横位の並行沈線を施す。外面について、1は横位に並行する沈線をクランク状に結び、区画内に縄文を充填するものである。9の外面も4条の沈線を並行させる同様の精製深鉢であるが、クランク状の区切りは無く、縄文も充填されていない。2・3・5～8と10・11は加曽利B1式期を特徴づける精製の鉢形土器である。5は器形が楕円の舟形となる。鉢形土器には「の」の字状の単位文が認められるもの（5・10）がある。また5の口縁部はやや内傾する。単位文は、これを持たないもの（堀之内2式末～加曽利B1式古段階）から持つものへ移行するとされ、深鉢の口縁部は直立したものから内傾したものに移行する。また鉢形土器は小型のものから時期が下るとやや大きくなる傾向にある。住居跡床面およびピット出土の鉢形土器に単位文や口縁部の内傾が認められず、一方覆土出土の鉢形土器に単位文（5・6）や口縁部の内傾（5・8）またやや大きくなる傾向（8）が認められることは、床面・ピット出土の土器と覆土出土の土器で若干の段階差を感じさせると言えないことも無いが、絶対的な数が少なく、断定はできない。36は3単位の波状口縁に直線的な外開きの器形となる粗製深鉢で、口縁部に押圧された粘土紐がめぐり、胴部には縄文と沈線が施される紐線文系土器である。37も縄文が施される粗製深鉢であるが、36とは異なり、口縁部がやや内傾した器形となる。36・37は覆土下層からの出土と報告されている。38は覆土上層出土とされる土器である。やはり縄文の地文に沈線が施された粗製の深鉢形土器であるが、口縁部は平口縁となり、頸部に括れを有する。37よりも新しい傾向を示す加曽利B2式である。図示していないが、覆土上層からは斜位の沈線を格子目に施した半精製土器や頸部に括れを持つ粗製深鉢の破片が出土しており、ともに加曽利B2式と判断される。

小丸遺跡14号住居跡：加曽利B1式（第3図53～56）

加曽利B1式期の一括出土事例として横浜市小丸遺跡14号住居跡・同遺跡28号土坑・同遺跡1・2号住居跡を挙げる。

14号住居跡は3基の炉址と重複する柱穴群からd→c・b→aの4度にわたる建て替えが想定されている。このうち住居跡dが加曽利B1式以前、c～aが加曽利B1式に比定されている。出土土器は少ないが比較的まとまっている。53は床面出土の鉢形土器である。14号住居跡の最終段階に比定された住居跡aに伴う土器としてよいだろう。口縁部は平口縁でやや内傾した器形となる。文様は沈線によってクランク状に区画された中に縄文を充填している。また器面には黒彩と赤彩の痕跡を残す。54～56は覆土中出土の土器である。54は口縁部直下に沈線を多段に配した鉢形土器である。55は口縁が内傾する鉢形土器で、沈線による区画内に縄文を充填するものである。56は器形と文様から注口土器とみられる。粗製土器は縄文が施された破片のみ認められた。

小丸遺跡28号土坑：加曽利B1式（第3図57～59）

28号土坑は隅丸の長方形を呈する。その形状から墓坑と考えられ、同じく墓坑と考えられる27号土坑と重複するが、前後関係は明らかではない。また27号土坑出土と報告されている小形の鉢形土器もどちらの土坑に属するのか明瞭ではないが、ここでは報告書に倣い、掲載の3点57～59を共伴事例とする。57は3単位の波状口縁の頂部に左右非対称の耳状突起を付けた精製深鉢形土器である。胴部外面にはクランク状に屈曲させた並行沈線による区画内に縄文を充填し、内側には口縁部に並行させた3条の沈線を配する。58は鉢形土器である。クランク状の区切りを入れた並行沈線を口縁直下の胴部外面に多段に配している。59は小型の鉢形土器である。クランク状の区切りを持つ並行沈線を多段に配している。

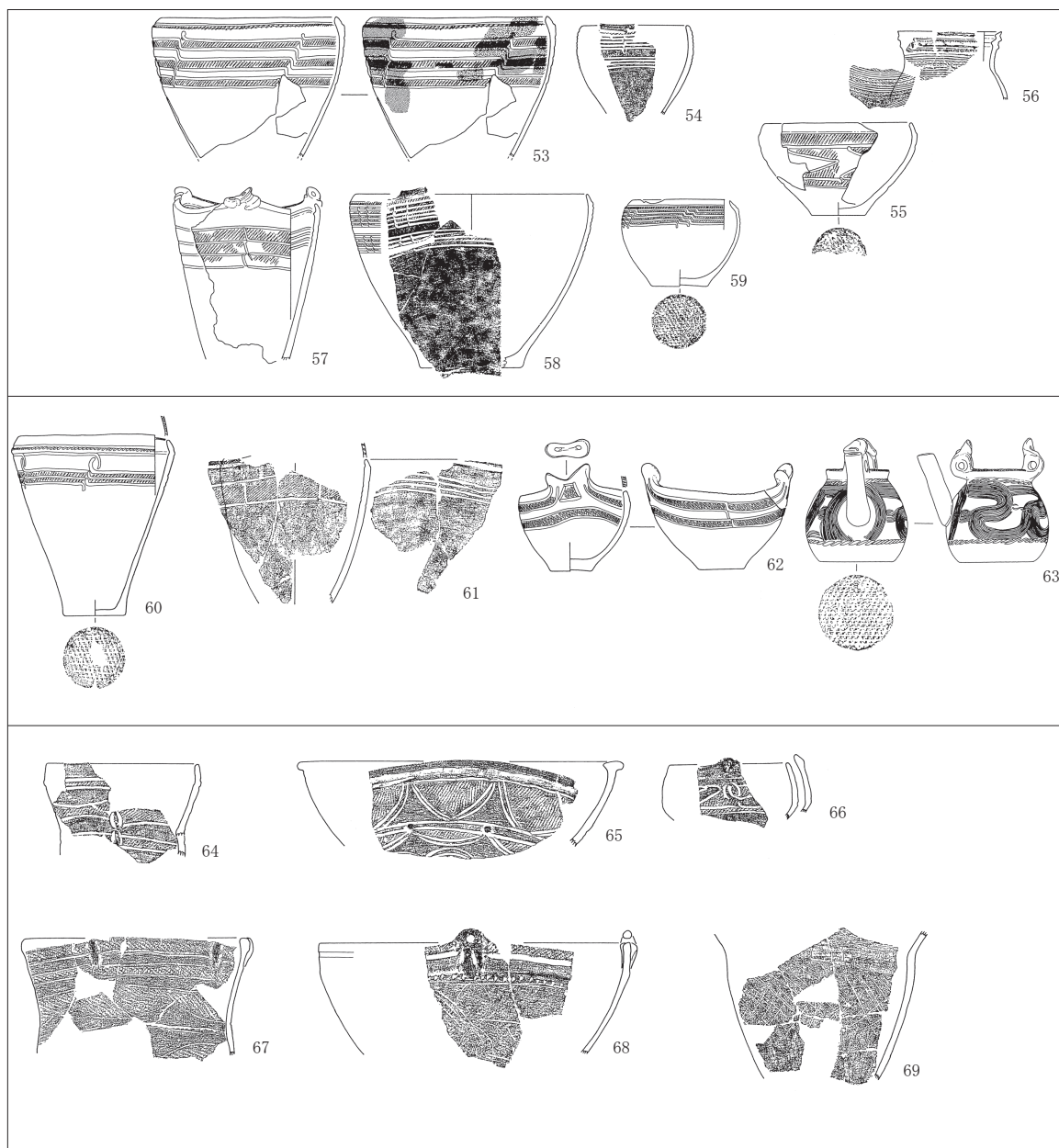
小丸遺跡1・2号住居跡：加曽利B1式（第3図60～63、第4図70～73）

1・2号住居跡は集落遺跡の要というべき位置に占地し、10回を超えた建て替えが繰り返されてきた「多重住居跡」で当該期集落遺跡における「核家屋」とされる住居跡である。出土土器は2基の埋甕を含め、出土土器は繰り返された建て替えのほぼ下限を示す土器群として大過無いものと理解されよう。

図示した土器のうち、73と70が埋甕である。73は縄文が施された粗製土器である。口縁が外開きで頸部がやや括れた器形に図示されているが、拓本で示した箇所から胴部下半の間の破片を欠き、頸部から下は復元である。縄文の施文も頸部までの破片にしか認められていない。70は斜行する沈線を格子目状に施した半精製土器である。60は2号住居跡床面に口縁をほぼ床面に接するように出土したとの記載がある。その一方で報告書の執筆者は、前後関係から、2号住居跡ではなく、1号住居跡に帰属した可能性を述べている。口縁部が内折した精製の深鉢形土器で、外面口縁直下のクランクする沈線は入り組み状となり、これまで見てきた精製の深鉢形土器よりも新しい傾向を示す。61は沈線によるクランク状の区画内に縄文を充填した精製深鉢形土器である。口縁は部分的にしか遺存していないが、波状を呈していることがわかる。柱穴出土と記録されているが、1・2号住居跡のどの柱穴に帰属するは不明である。62は2号住居跡の範囲に位置する柱穴付近の床面上15cmから出土した鉢形土器である。小形・舟形で両端に摘み状の突起部を有する。突起部を有する小形鉢は、これまでの事例より新しい傾向を見せるものとしてよい。63の注口土器について、出土状況は不明である。型的にはここに示した他の土器に比較して古い傾向を示し、あるいは時間的に先行する位置に置くべきかもしれない。71は2号住居跡の覆土下層、72は1号住居跡の床面から出土している。71・72とも縄文のみが施された粗製深鉢形土器である。ともに外開きの器形で頸部の括れを有していない。

原口遺跡J13号敷石住居跡：加曽利B1式（第5図79～92）

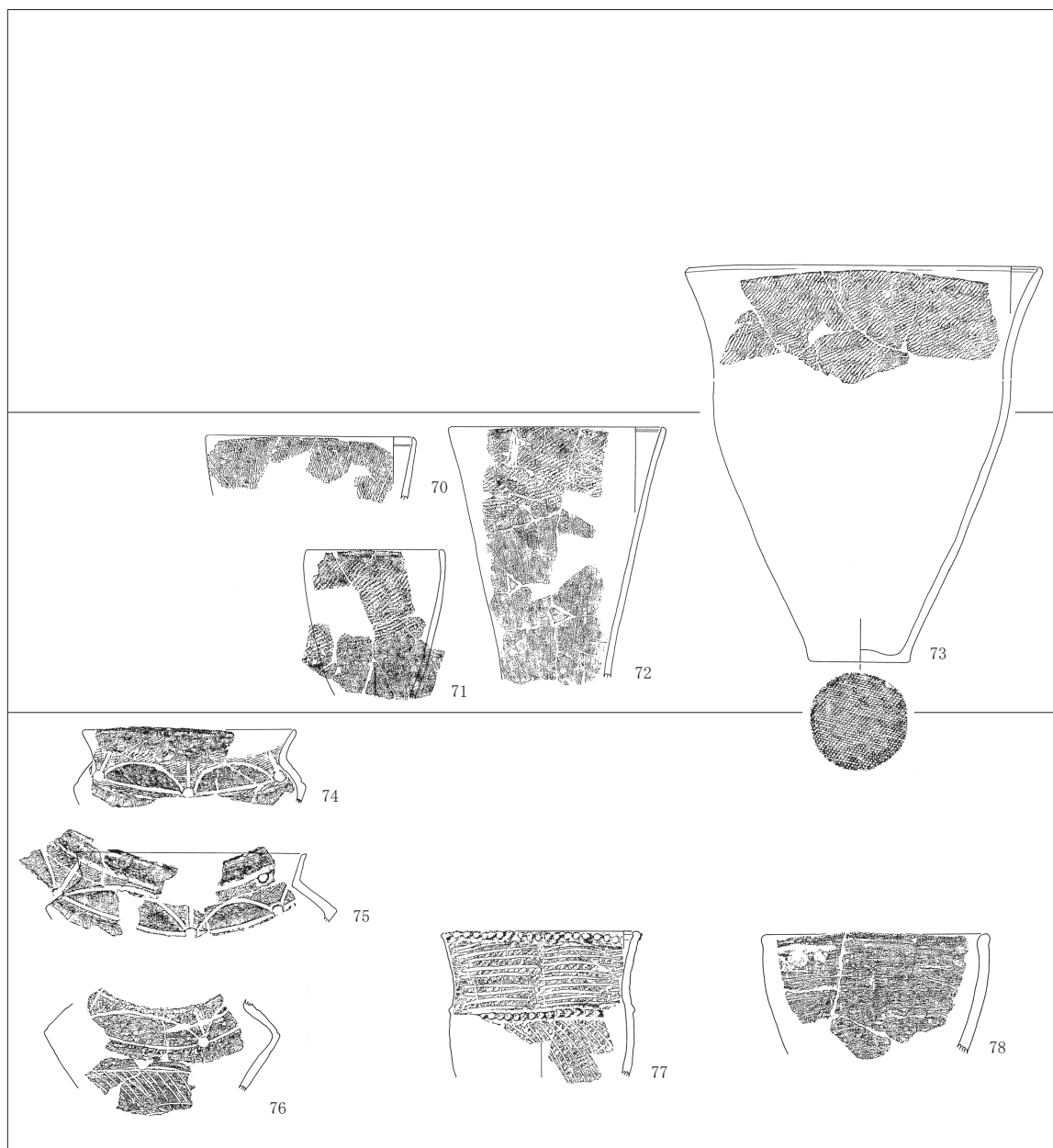
J13号住居跡は遺跡の北東側に突出する舌状台地の基部に位置し、道路エリアと呼称される狭小な調査区での検出である。加えて2基の方形周溝墓に覆土と床面・柱穴・敷石を切られ、全容は不明である。住居跡の張り出し部を中心とした範囲の調査となった。ここに図示した資料は敷石の上面あるいは下面からの出土である。79～84は精製の深鉢形土器である。79・80は口縁直下の外面に沈線によるクランク状の区画を配し、内面にはやはり口縁直下に並行する沈線を多段に配するものである。クランク状の区画に縄文は施していない。79は平口縁、80は3単位の波状口縁となる。81は3単位の波状口縁の頂部に、左右非対称の耳状突起を付けた小型の精製深鉢形土器である。口縁直下の並行沈線による区画は入り組み状をなし、内外面の沈線間に縄文を充填している。82は口縁直下の外面に沈線によるクランク状の区画を配し、内面にはやはり口縁直



第3図 加曽利B1～B3式土器（縮尺1/8）

53～56小丸遺跡14号住居跡：加曽利B1式、57～59小丸遺跡28号土坑：加曽利B1式、60～63小丸遺跡1・2号住居跡：加曽利B1式、64～69華蔵台遺跡32号住居跡：加曽利B2～B3式

下に並行する沈線を多段に配するもの。79同様の器形となるが、外面の区画内に縄文を施す。83も同様のものだが、口縁部は内折し、内側の屈折部に横位に連続する円形刺突を施す。84は内外面ともに並行する沈線を多段に配するものである。85～87は小型の鉢形土器である。84は縄文が施されたもので、小型の深鉢形土器の可能性もある。86は無文の鉢形土器、87は口縁直下の外面に沈線を多段に施した鉢形土器になる。87の口縁は緩やかな波状を描き、波頂部直下に「の」の字文を配する。88～90は堀之内2式期から系譜を引く大型の鉢形精製土器である。88は播鉢形を呈する比較的大きな個体で、口縁直下の内面に沈線を多段に施し、要所に「の」の字文を配する。89は口縁部が緩やかながら四単位の波状となる内面に刻みが施された並行沈線が多段に配されている。90は両端を波頂部とする舟形の鉢である。長辺側に位置する波底部には長台形の



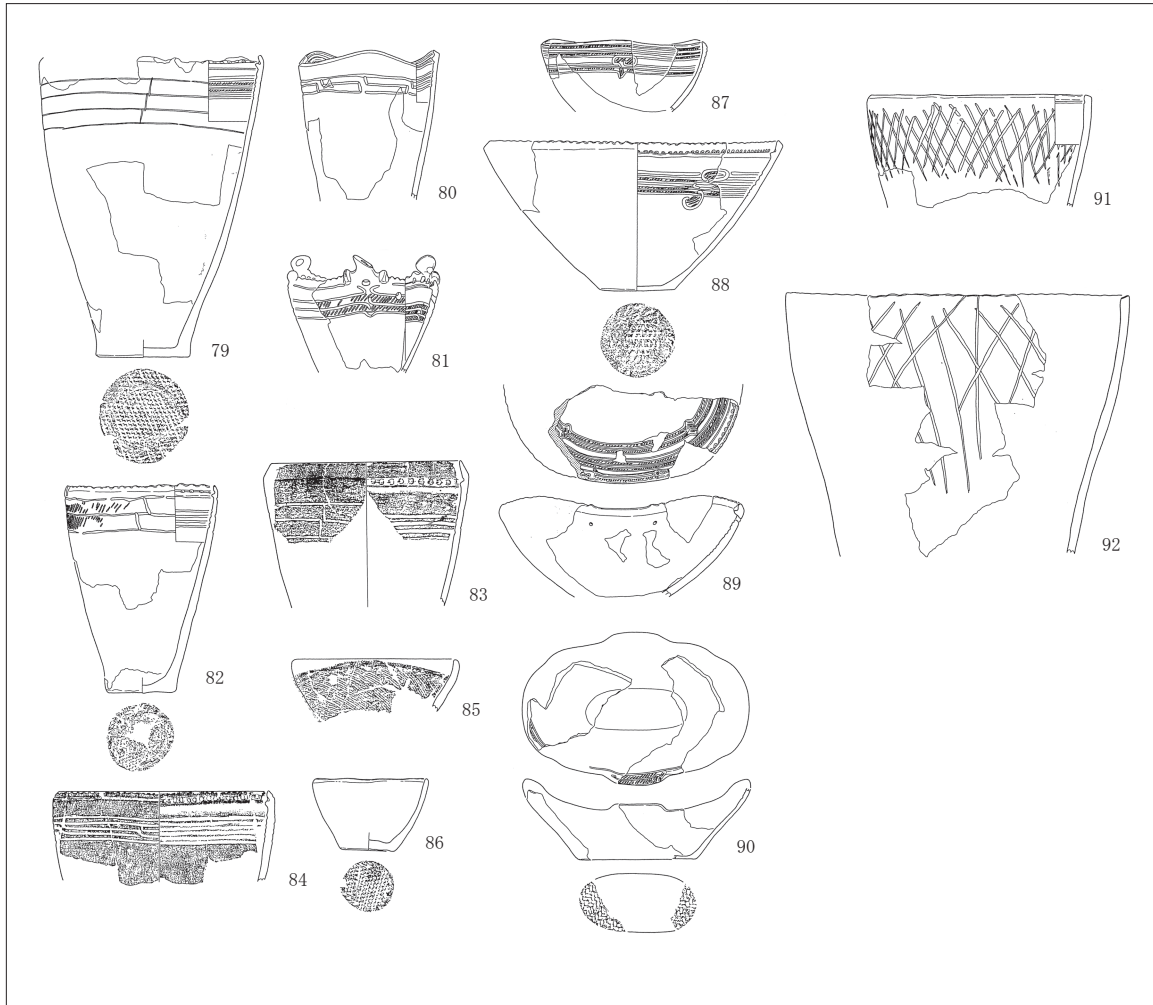
第4図 加曽利B1～B3式土器（縮尺1/8）

70～73小丸遺跡1・2号住居跡：加曽利B1式、74～78華蔵台遺跡32号住居跡：加曽利B2～B3式

突起が付けられ、内面側に縄文が施される。91と92は斜行沈線を格子目状に施した粗製の深鉢形土器である。91は口唇部の内面側に沈線を巡らせ、92は口唇部に刻みを施している。

子易・大坪遺跡J13号敷石住居跡：加曽利B1式（第6図93～98）

J13号敷石住居跡は敷石と張り出し部、外周に周堤礫を有する敷石住居跡である。柱穴列に沿って小礫の集中が認められる「環礫方形配石遺構」でもある。遺構の遺存状況は良好で出土遺物も多いが、器形が復元可能な個体は限定される。95と97の鉢形土器は床面に相当するレベルより下位の出土で、報告では埋甕（埋設土器）としている。94は周堤礫上の出土で、厳密には住居範囲外からの出土というべきである。93・96・

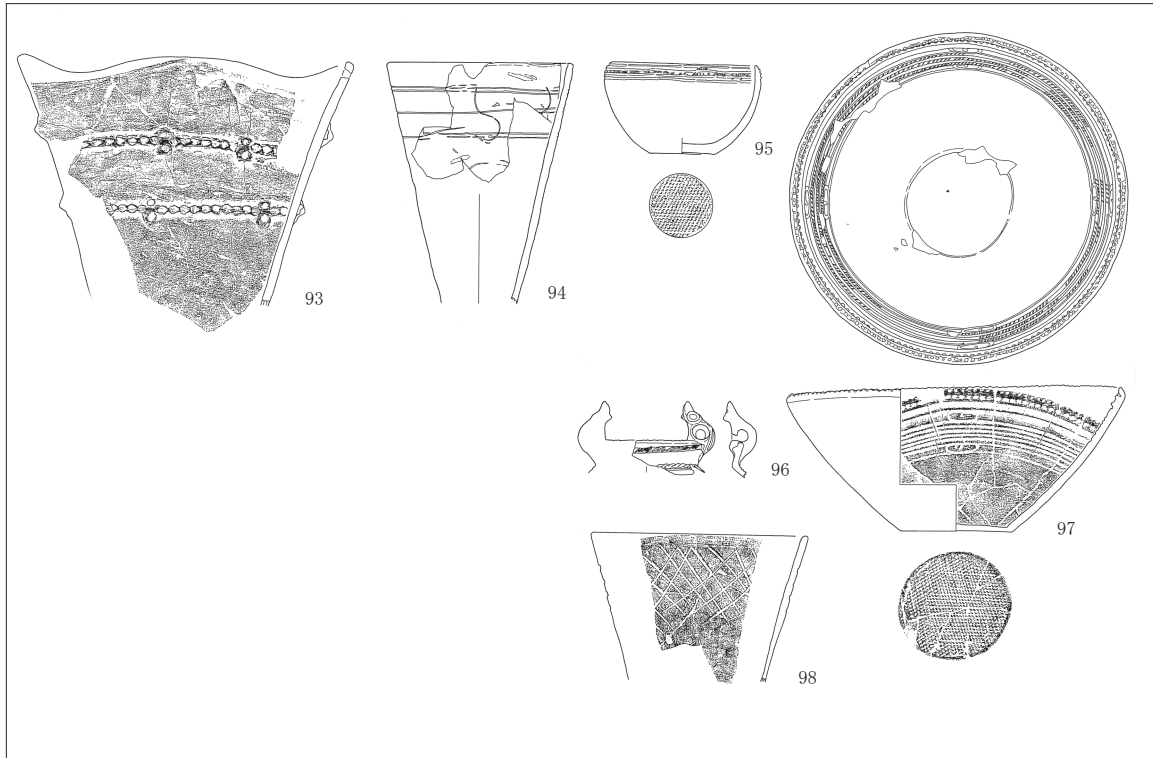


第5図 加曽利B1土器 (縮尺1/8)
79～92原口遺跡J13号敷石住居跡：加曽利B1式

98の出土状況はわからない。93は報告者によってB1式とされている。口縁部の8の字状貼付文と紐線文の消失および無単位の横帯文の組み合わせの成立後(下北原遺跡第14号住居跡の一括資料を堀之内2式とする)を加曽利B1式とする本稿の立ち位置からすると、前段階に位置付けるべき土器である。94は外開きの器形に口縁部直下の外側に横位の沈線による区画を配する精製深鉢形土器である。縦位置にS字状の粗雑な区画線を入れている。堀之内2式末～加曽利B1式の中でどこに位置付けるべきか判断に迷う土器でもある。95は上述した通り、埋甕(床面への埋設土器)とされた小型精製の鉢形土器である。口縁部外面に沈線を多段に配する。96は加曽利B1式の注口土器口縁部である。97は原口遺跡J13号敷石住居跡でも見てきた堀之内2式期から系譜を引く大型の鉢形精製土器である。器形は播鉢形を呈し、口縁部は非常に細やかな波状となる。口縁直下の内面に沈線を多段に施すとともに、要所に「の」の字文を配する。98は斜行沈線で格子目を描く粗製の深鉢形土器である。外開きの器形を呈し、推定径が20cmと比較的小型である。

華蔵台遺跡29号住居跡：加曽利B2～B3式 (第1図13～35、第2図40～52)

加曽利B2～B3式期の共伴事例として華蔵台遺跡29号住居跡の事例を掲げる。実は加曽利B2式前半段階の良好な共伴事例をここに掲げることが出来なかった。本来であれば小丸遺跡28号土坑の57や原口遺跡J13



第6図 加曽利B1土器 (縮尺1/8)
93～98子易・大坪遺跡J13号敷石住居跡：加曽利B1式

号敷住居跡出土の81のような口縁部に3単位突起を持つ精製深鉢の系譜に連なり、突起が簡略化されるとともに頸部が括れた土器や、平口縁の精製深鉢の系譜にある縄文と沈線による区画間の分離がより顕著なものとなる土器を、ここに示せてはいない。

本住居跡は、既述の華蔵台遺跡16号住居跡とは別となる同集落遺跡の南縁斜面に臨む場所にある住居跡集中重複箇所にある。ここは遺跡内でも著しい住居跡の建て替え・重複が見られる場所の一つであり、本住居跡自体25号・26号住居跡と重複するが、出土土器はある程度の幅を見せながらも比較的まとまった様態を示す。これは例えば、すぐ近くにある28号住居跡が復元土器を含めた多数の遺物を有しながら、その内容が堀之内2式から加曽利B1式・B2式にわたる非常に複雑な様相を呈するのとは異なる。13は胴部が括れ区画内に縄文を施す精製深鉢形土器である。胴部の単位文となる「い」の字の縦位短沈線が認められ、ここに掲げた29号住居跡出土の加曽利B式土器としては最も古く、加曽利B2式前半期と判断されるが、口縁部はごく一部しか遺存しておらず、平口縁や波状口縁となるものか、突起部を有するか否かはわからない。14～17やあるいは40は加曽利B2式後半以降に位置付けられる。14と16は沈線を上段左下がり、下段右下がりの斜位に施し、間を平行する沈線で画して無文帯とした深鉢形土器、15は矢羽状に施した沈線を上下に配し、沈線で区画した間を無文帯にするもので、ともに胴部の括れた外開きの器形となる。17は胴部に括れを有し、斜行する沈線を矢羽根状に配した深鉢形土器である。口縁部の形状は紐線文系土器に近く、半粗製土器と位置付けられるかもしれない。40は算盤玉形の鉢形土器である。前述した斜位沈線を矢羽根状に施した土器(14～17)と合わせて当該段階以降を特徴づける土器とされる。鋭く内折した胴部に外開きの口縁部が立ち上がっている。算盤玉形の胴部上半に弧状の区画による磨消縄文が配され、胴下半には無文部を挟んで矢羽根状の斜行沈線が配されている。41は口縁部に斜行沈線を、無文の区画を挟んだ下半に弧状の沈線を多重に施す土

器である。41はその形状から脚付土器になる可能性が高い。42は斜行沈線が格子目状に重ねられた鉢である。43も鉢形土器である。41・42が口を大きく外側に開くのに対し、43はやや内傾気味に立ち上がっている。上下に対になった弧状沈線による区画に縄文を充填する磨消縄文となる土器で、本図には示せていないが同じ段階の3単位の突起を有する精製深鉢形土器や、やはり縄文を施す平口縁の精製深鉢形土器と共通する文様である。

18～22・25～27は加曽利B3式である。18～20は3単位の突起を有する精製深鉢形土器の系統上になる土器である。胴部には磨消縄文ではなく矢羽根状の斜行沈線を配している。21も同様のものだが、突起は著しく形骸化している。22は後述する25同様の波状口縁となるものである。口縁部に縄文を、胴部の括れから上に斜行する沈線を矢羽根状に配する。また同下半は無文となる。23は14～17同様に斜行する沈線を矢羽根状に配するものである。どこに置くか迷う土器であるが、口縁部に2本の沈線を引き縄文を施す点が22・28に共通することなどを後出の要素として、14～17よりも下段に置いた。24は胴部の括れよりも上側を無文、下側に地文として縄文を施し、さらに横位の沈線を多段に重ねた土器である。

25はおそらく5単位の波状口縁となる精製深鉢形土器である。胴部は大きく括れる。上下に入り組み状に対置させた弧状沈線間に縄文を充填させた磨消縄文を施す。26は胴部の括れから口縁に向けて窄んだ広口壺状の精製土器である。上下に向かい合う弧状の沈線を連結させ、間を磨消縄文とする。25と26はこれまでの系統にはなく、当該段階で出現する土器であり、次段階の曽谷式に引き継がれる系統でもある。27は刻みを施した口縁部にコブ状の突起を配した深鉢である。胴部には弧状沈線による区画内に縄文を施し、磨消縄文とする。28は口径40cmを越える大形の土器である。口縁部は波状となり、おそらくは波頂部が5単位となるものと想定される。口縁部に沈線と縄文を添わせ、波頂部に円形の貼付文、波底部に弧状の貼付文を配する。また胴部の屈曲から上には縦位の蛇行沈線をやや間隔をあけて連ね、下に斜行沈線を連ねる。斜行沈線の間隔は14～17あるいは25に比較して広い。30・31は斜行沈線を格子目状に配するものである。30は地文に縄文を施した上に、胴部の括れに2本の沈線を配して沈線間を磨り消し、さらに斜位の沈線を格子目状に施している。32～34は小型の鉢形土器である。32は内側に屈曲し、口縁部と屈曲部に縄文、また同じく屈曲部に刻みを、下半に矢羽根状の斜行沈線を施したものである。33は口縁部が小さな波状の連続で構成される。34は丸底の鉢で、口縁部はわずかながら波状を呈する。沈線による区画内に縄文を施している。

44～48・49～52は所謂紐線文系の粗製深鉢形土器である。縄文を地文とした上に条線を施し、口縁部ある胴部の括れに押捺した粘土紐を貼りつけたものである。49は大型の粗製深鉢で、肥厚した口縁を斜めに切り、広めの押捺を施したものである。胴部には縦位と斜位の沈線を配するが、縄文等の施文は行われていない。これらの粗製土器は本住居跡から出土する加曽利B2～B3式に概ね伴うものとしてよいだろう。

華蔵台遺跡32号住居跡：加曽利B2～B3式（第3図64～69、第4図74～78）

加曽利B2～B3式期の共伴事例として同じく華蔵台遺跡32号住居跡の事例を掲げる。本住居跡も既述の華蔵台遺跡29号住居跡同様に、集落南縁斜面に臨む場所にある住居跡の集中重複箇所にある。本住居跡は著しい重複が観察される31号住居跡（堀之内2式期）と重複し、これを切る位置にある。出土土器は堀之内2式期の混在もあるが、加曽利B2～B3式期の比較的まとまった様態を示す。

64は胴部が括れ、区画内に縄文を施す精製深鉢形土器である。区画は一部対弧線状をなし、単位文となる「い」の字状の縦位短沈線を連ねているのが観察できる。口縁は平口縁となるが、突起の有無は確認できない。

華蔵台遺跡29号住居跡出土の13と同じ段階に置くことが出来るだろう。65は報告書での記載は無いが、比較的大きな鉢形土器になるものと思われる。2本の沈線により弧状の区画を作り、内部に縄文を充填する。66は胴部の屈曲する鉢形土器である。口縁部に小さな突起を有し、突起下の「い」の字状の単位文に区画の沈線が入り組んだ形状をなす。64と同じく加曽利B2式の古い段階である。

67～69は加曽利B3式である。67は華蔵台遺跡29号住居跡出土の27と同じく、口縁部にコブ状の突起を配した深鉢である。胴部には弧状沈線による区画内に縄文を施し、磨消縄文としている。68は大型の鉢形土器で、口縁部に瘤状の突起を配し、胴部には浅い沈線で文様を描く。突起下に緩いS字に逆S字を重ねた単位文を配し、さらに横位の沈線を重ねている。69は斜位の沈線文を格子目状に配した深鉢形土器である。胴部に括れを持つ。74～76は頸部と胴部が屈曲する算盤玉形の鉢形土器であり、加曽利B2式～B3式に位置付けられる。算盤玉形の胴部上半に弧状の区画による磨消縄文を配する。76は胴部下半に斜行沈線を確認できる。77は紐線文系土器である。口縁部と括れ部下の肩の位置に指頭圧痕を施した隆帯を配し、地文の縄文上に上段は横位の、下段は斜位の沈線を連ねる。78は無文の深鉢である。

小括

今回は、住居跡を中心とした遺構からの一括出土事例に基づく加曽利B式期の編年構築を目指しながら、冒頭述べたように各段階を通じた良好な共伴事例には必ずしも恵まれず、一括出土事例各種土器を、ある程度時間軸に沿った形で並べたものにとどまった。特に加曽利B1～B3式の各段階で認められる3単位突起を有する精製深鉢形土器（57・80・18～20）の系譜をきちんと示すことが出来ず、各段階の土器群の様相についてもその十分な内容を示すことが出来なかった。加曽利B式土器は土器の器形や文様の変化に加え各系統の出現消長がその画期におおいに意味をなすとしてよいだろう。文中でもふれた斜行沈線を配する精製土器の一群（14～1741・42）や算盤玉形の鉢（40・74～76）あるいは5単位の波状口縁深鉢（25）や胴部の括れから口縁に向けて窄んだ広口壺状の精製土器（26）などの共伴事例についてより詳細に詰めていく必要がある。また、東京湾沿岸部に位置する県東部と相模湾側の県央、また県西部での地域的相違についても言及出来ていない。粗製土器は県東と県西で明らかに傾向が異なるほか、堀之内2式期から系譜を引く大型の浅鉢形土器にもその共伴に東西差があるのか確認する必要があるかに思われる。全県域を通じて加曽利B1式の資料に比較的恵まれながら、加曽利B2式以降の資料が貧弱なものも作業を進める上でのネックとなっている。冒頭の繰り返しとなるが、次年度以降の作業において、単体出土の資料や他地域の土器を参考資料として掲げ、また足りない部分については型式学的な操作を通じて編年案を構築する必要がある。

（小川岳人）

【引用参考文献】

- 山内清男 1939（再版1967）『日本先史土器図譜』第Ⅲ・Ⅳ集 先史考古学会
 安孫子昭二 1971 「加曽利B式土器の変遷」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』南多摩郡平尾遺跡調査会
 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『縄文土器大成 3 後期』講談社
 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曽利B式土器の研究（Ⅰ）－最近の成果の検討と新たな分析－」東京大学考古研究室研究紀要2号
 大塚達朗 1984 「寿能泥炭層遺跡出土の加曽利B式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
 百瀬長秀 1984 「羽状沈線文をもつ土器の系統と展開」長野県考古学会誌49
 大塚達朗 1986 「型式学的方法－加曽利B式土器」季刊考古学17号

- 安孫子昭二 1988・1989 「加曽利B式土器の変遷と年代（上）・（下）」東京考古6・7
- 西田泰民 1989 「堀之内・加曽利B式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館
- 大塚達朗 1989 「加曽利B式三細別における祖語の解消—学史的・理解とは何か—」先史考古学研究第2号
- 大塚達朗 1990・1992 「失われた書物を求めて（1）（2）～加曽利B式研究から見た昭和考古学～」利根川11・13
- 秋田かな子 1994 「加曽利B式注口土器の研究（予察）—王子ノ台遺跡出土の注口土器から—」東海大学地内遺跡調査団報告4
- 大塚達朗 1996 「加曽利B式土器」『日本土器辞典』大川清・鈴木公雄・工楽善通編 雄山閣
- 縄文セミナーの会 1996 『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相 資料』
- 安孫子昭二 1998 「加曽利B式土器資料」『山内清男考古資料9—縄文後期加曽利B式・中国地方の陶棺・下総国分寺・尼寺資料—』奈良国立文化財研究所
- 秋田かな子 1998 「加曽利B式土器の構造変化システム—南関東西部における様相をふまえて—」東海史学32号
- 秋田かな子 1999 「関東地方後期（加曽利B式・曾谷式）」縄文時代10号
- 秋田かな子 2002 「加曽利B2式鉢形土器の性質—型式内位置に見る諸現象から—」『日々の考古学』東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会
- 大塚達朗 2004 「「の」の字単位文考—加曽利B1式の理解として—」縄文時代第15号
- 秋田かな子 2005 「堀之内2式土器 加熱系土器 製作の一断面—関東西部における表示性希薄土器の存在形態—」土曜考古29号
- 秋田かな子 2006 「関東地方後期前・中葉にみる土器文化の展開—形式の変化と維持をめぐって—」『縄紋社会をめぐるとシンポジウムⅣ—土器型式をめぐると諸問題—予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 石井 寛 1999 「小丸遺跡」 港北ニュータウン埋蔵文化次調査報告25
- 長岡文起 2002 「原口遺跡 Ⅲ」 かながわ考古学財団調査報告 134
- 石井 寛 2008 「華蔵台遺跡」 港北ニュータウン埋蔵文化次調査報告41
- 天野賢一・大塚健一・三瓶裕司他 2013 「子易・大坪遺跡 子易・町屋裏遺跡」 かながわ考古学財団調査報告292